

誰しも見知らぬ土地を訪ねる時には、目的地や周辺の地図を広げるものだが、北方四島に限っては、Google map で検索しても白地図が現れるだけである。Yahoo map から検索してみると、河川、湖沼、湾の地名が表記されているに過ぎない。つまり現状では北方四島は招かれざる島々なのだ。もちろん島に上陸すれば、ロシア語の道路標識は目にする事ができるが、地域マップはどこにも設置されていないので、日本人である自分の足で訪問地に辿って行くことはできない。従って、自分の意思のみで四島を訪れることはまずもって不可能であるので、このたび実に多くの関係者の準備と交渉と手筈のおかげで、7月6日から10日まで2017年度第1回交流事業に参加できたことで、北方四島に関して自分がいかに不明であったかを時々刻々思い知らされ、多くを学び、漸くにして頭と心に一灯をともすことができ、人生の中で特別な旅だった。とはいえ、短期間の交流訪問であったので、「細部に真実が宿る」とのひそみに倣い、この間に教授を受けた大事と、体験した些事を積み上げることから、民間の立場から北方四島返還を考えてみたい。

わたしはいち早く3日に「朝日に一番近い街」根室に赴き、地元のジャズカフェ「サテンドール」のオーナー夫妻、常連である水産加工会社の会長、根室駅前の土産店オーナーや宿泊ホテルのオーナーから東京では聞けない地元情報を授けられた。

5月初めから10月中旬まで両国のそれぞれの訪問団をことごとく輸送している日本建造の「エトピリカ号」はわたしたち団員61人を乗せて、年に一度あるかないかほどの風の中を、難所と云われている国後・択捉間の海峡も、往復ともゆったりと運んでくれた。これは日頃の善行のお陰だと口々に褒め称えあったものだが、本交流事業は今回で26年目を迎え、2012年に1124トンのエトピリカ号が建造されるまでは、480トンの小船で荒海を越えてきたのだから、それに乗って難儀した諸兄弟に感謝をしなければならない。船中泊でもあったので、日々、夜遅くまで研修や情報交換の集いが開催され、これはもうひとつの有意義な交流をもたらすと共に、無知なわたしは事前に郵送を受けた数々の資料と乗船前日の研修会と併せて、北方四島が抱える様々な現状と課題を学ぶことができた。



団員には元島民やその家族の方々、議員の先生方、ジャーナリストの方々さらに園芸家や海洋学専門で温泉に造詣が深い教授が加わっていて、多事多彩を語って戴いた。元漁師で甲板員であった方からも漁師が抱える問題や昔話を喫煙室で聞くこともできた。まさに「交流事業」参加であった。

両島への上陸は、はしけを使わなければならない、団員はほとんど初対面にも拘らず声を掛け合ったりしながら、みなさん小学生宜しく一列に並んで入域検査を受けながら乗下船した。こういう団体行動はわが同胞の得意とするところであり、おおよそ守られることがない他国の旅行団体とはさすがに一線を画している。要所要所では児玉団長の声が団員の耳に届く。船中では顔が見えなくともスピーカを通して聞こえてきた。



7日早朝入域した国後島では、用意された車に分乗、地区行政府表敬訪問から交流事業は始まった。ドライバーは島民の方々に自分の車で言葉が通じない人々を喜んで運んでくれた。みんなおもてなしが素晴らしかった。こちらから小さなプレゼントをしたらもっと素敵なお返しを戴いた。9日夜択捉島を出域、国後島経由で10日正午に根室港に戻るまで、多彩な計画に基づいて、豊かな交流の場面が備えられ、わたしたちはそこに導かれ、時が流れて行った。

国後島ではアリヨンカ幼稚園、択捉島では紗那保育幼稚園を視察したが、いずれもプレハブの堅牢な建物であり、園庭に設置されている遊戯施設も木製で重厚そのものだった。園内の運動室は木製の床で柔らかく壁にはスポーツ用具が多種多様掛けてあり、音楽室には大人も嬉しくなるような自然界を織り込んだカラフルなカーペットが敷かれ、ト音記号を背もたれにあしらった椅子が並んでいた。ドイツ製のアコーディオン、指人形劇の装置、数々のコスチュームも備えてあり、こどもたちの歓声が聴こえてきそうだった。特筆すべきは、日本の幼稚園では見かけることがないインタラクティブホワイトボードが設置されていた。先生に伴われて園庭でスカーフを首に巻いて遊戯をするのだろうか、園児たちが列を作っていた。日本のようにワイワイガヤガヤせず静かに先生の言うことを聞いていた。昼食の光景ではスプーンを持ったニコニコ顔の幼年クラスの園児たちそれぞれに、スープと野菜と肉がたっぷりのふた皿が配られ、パンと一緒に食べていた。この場面でも私語は聞かれなかった。みんなマナーも教わっている。昼寝のための部屋があり、二段式のベッドが並べてあり、清潔で可愛い枕と毛布が備えてあった。階段の手すりが、幼児、園児そしておとな用に高さを変えて三本ついているのには感服した。これらは日本の保育幼稚園ではみかけないものだ。なにもかもが豊かであった。

面白かったのは、遊戯室の壁にミッキーマウスや芋虫のハイムリックなどが描かれ、馬のブルスアイの人形も見かけた。「こどもの漫画には国境はないですから」と、先生がおっしゃった。教育にとっても力を入れているように見受けられたが、南クリル地区(国後、色丹)にある5つの保育幼稚園(園児は450人2歳から7歳まで歳別にクラス編成、障害児は8歳まで)はどこも定員オーバーで、新しい保育幼稚園を建設中であるとのことだった。街中

でも子供の姿を見かけること多く、その訳は、クリル諸島社会経済発展プログラムに基づく出産奨励によって、第二子までは一時金が支給され、第三子誕生となるとサハリン州では土地が提供されるということだった。また、軍基地もあるため若いカップルが多く、従ってこどもの増加率が毎年高まっているようだ。ついでに 980 人の児童生徒が通っている小中学校（南クリル地区に 5 校）も視察したくなるほどだった。



街中で子どもたちに出会うと、「こんにちは！」と度々声掛けられた。咄嗟のことなので、こちらは「ズドラーストヴィチェ！」が口に出ず、ぎこちない「Konnichiwa！」となってしまった。このような他愛無いような出会いと会話の積み重ねこそが大切だと痛感した。

現在北方四島渡航に関する枠組みは、墓参、元島民の自由訪問並びに四島ロシア人とのビザなし交流、専門家交流として 1992 年から長きに亘り続いてきたが、それでもいまだに渡航が阻まれることが起こっている。われわれの根室港出発の日（6 日）には、8 月に予定だった歯舞群島の水晶島への元島民とその家族の自由訪問が中止された（北海道新聞 7 日朝刊）。昨年 2016 年 12 月の日ロ首脳会議では墓参の拡充は合意したが、ロシアは元島民と家族がかつての居留地を訪れる「自由訪問」は対象外とし、歯舞群島とか水晶島という地名は存在しないとして入域を認めなかったという。

また、わたしたちの訪問に先立ち、6 月 27 日から 7 月 1 日まで、昨年 12 月の両国首脳会談で提唱された「新しいアプローチ」における共同経済協力に基づき、官民経済調査団が色丹島を加えた三島を訪問し、80 もの合意文書が交わされたものの、すべての仔細は発表されていない。共同経済協力は重要なテーマであるが、視察した限りでは、相当な開発・修繕・補強のための資金と時間がかかると思った。港湾の浚渫工事、旅行者ターミナルや倉庫等港内施設の新設、主要道路の拡張並びに延長、道路標識の日本語標識板設置、通信施設システムや電力、上下水道等インフラ整備等基盤整備に始まり、観光やビジネス向けホテルや飲食店、物産店の増設、バス路線の拡充、公園整備や公衆トイレのシステム強化と増設、廃棄物処理等環境対策、雇用促進のための産業開発や誘致政策、教育訓練施設の充実等、いわば「島づくり」であって、長いマイルストーンを定めて粘り強く持続する力量が求められる。繰り返し発生する大地震対策も欠かせない。

さらに、団員のメンバーでもある元島民であった鈴木咲子さんの講話のなかに、択捉島ヒトカップ湾から真珠湾攻撃のために帝国海軍艦隊が終結して出航していったという話があった。根室の土産店店主である佐々木弘往氏からも尊父が当時国後出張中に宿舎から外出を禁じられ、窓も占めるように命じられ、戦艦が終結して出航して行くまで、一月ほどとどめ置かれたとの話も聞いていた。ロシア側から見て国後・択捉は米国に最も至近距離に位

置している、従って軍施設を設置している（注1）。ロシアが決して返還しようとしめない本音を垣間見た気がする。

軍施設の強化に限らず、ロシアは択捉島にヤースヌイ国際空港を設置、昨年7月には1泊6万円の高級リゾートホテルを開業し、観光開発に力を入れている。ロシア人に限らず、韓国、ヨーロッパ各国の招待ツアーが展開されており、北方領土に関する歴史に疎い海外観光客がこの地を踏めば、ロシア領土であるとの誤解が事実とされ、喧伝される恐れがあるだろう。

このように厳しい状況下にある北方四島返還要求問題であるが、わが国が保有する優れた環境知見や教育・文化交流に係る諸点に“燭光”を見出すこともできた。

団員として参加していた毎日新聞社の本間記者は、北方四島を含む千島列島における自然研究の第一人者で、一帯は陸地、海洋、気候の恩恵で様々な動植物の宝庫であり、120種の保護鳥のうち35種がレッドデータブック（絶滅種）に登録されている、そして列島の位置と海流に沿って鳥や魚が往来するという講話があった。そのなかで「自然に国境はない」と語られた。この講話は四島の住民にも傾聴してほしいと思った。自然環境の対話は、相互交流と理解の促進に相応しいテーマである。

国後島の郷土博物館並びに択捉島の歴史博物館を視察したが、有史以前から現代に至る北方四島の歴史概要の懇切丁寧な説明を受けたが、7000年前の人骨が見つかっていて、現住民はアイヌと考えられているが、どこで発見し、どのような経路で来たのかは不明であると興味深い解説もあった。しかし、現代歴史に関しては、大戦前までは概ね日本と同じ歴史認識であったが、大戦以降は省略的で、北方領土は大戦以降ロシア領となったとのみの説明だったのは物足りないところである。

国後・択捉の産業は、水産加工業に特化されており、例えば択捉島の人口6000人のうち3000人がギドロストロイ社の漁業・水産加工工場に雇用されている。漏れ聞く所によると、島民の中には収入を求めて、ロシア本土、なかんずく中央以西の都市に移転を望んでいるようだ。人口流動を抑えたいがために、クリル諸島社会経済発展プロジェクトで相当な投資が実行されているが、季節変動が大きい漁業・水産加工業での労働力の不足に対処するために、大陸からの出稼ぎ労働者が多い。わが国との人的交流が深化することで、ロシア人の優秀で向学心のある子弟が北海道本島等の工業高校や大学に留学し、就職に至るようになれば、両国民の友好は深まり、経済協力の促進並びに四島における経済自立にも寄与するだろう。併せて長期滞在による両国市民同士の対話の深まりを通じて歴史認識も是正されることが期待できる。

今回、文化交流イベントとしては、元島民3世でもある宗像さんを主宰とするコラボレーションユニット「ことのは」メンバー4人が日本の伝統の殺陣（たて）を披露、われわれ日本人も楽しみ、早稲田大学の剣道の達人平野さんは集まったこどもたちから竹刀で面打ちを受けるパフォーマンスで喝采を受けた。ロシア側からは歌と舞踏、なかでも解説がなかったのをつまびらかではないが、島の民話に基づく白鳥と島民との物語は心を打たれた。来場者の多くはスマホを持っており、盛んに写真を撮っていた。文化交流は楽しい思い出として残り、同時に多くの人々に伝えられるだろう。



いよいよ択捉島滞在最終日、交流の諸活動に馴染んできたところで、最も重要なホームビジットが団員数人ずつ 12 チームに分かれて行われた。通訳者は団員の積極的交流促進を促すために、訪問家庭を交互に巡回する仕組みで、各チームの通訳時間はわずかに 20 分程度と極めて短時間にするという事務局の「厚情」に励まされることとなった。つまり訪問時間の 1 時間半は通訳者不在となってしまいうため、身振り手振りを交えて懸命に「対話」をしなければならないことになる。黙っていたら「ザドルージュブウ！」と乾杯詰めになって、ウオッカで潰されてしまうと「忠告」を受けた訳である。わたしが加わったチームは 4 人で、コリガ・タチャーナ・ヴィクトロヴナさんのお宅だった。玄関に入るなり、娘のアリーナさん（11 歳）を筆頭に、コリガ夫人、妹さんとそのおんなの子、おぼさんの娘さんに甥っ子のマクシム君の総勢から歓迎の挨拶を受けた。「ズドラーストヴィチェ！」「スパシーバ！」と応えながら、広いリビングルームに招かれる。長くて広いテーブルには、中央に沢山のデイズが飾られ、前日からキッチンに立って用意されたであろうスープ、サラダ、魚や肉料理、クレープにピザパイ、スイーツに至るまで卓上一杯に、ビール、ウオッカ、ワインなどの飲み物と共に並べられていた。早速、プレゼンとの交換をしたが、マトリョーシカをあしらったテーブルセンターやお菓子等と共に、メッセージが書かれた算数ノートが袋の中に入っていた。このノートはわたしにとって最高のプレゼントだった。自分もなにか洒落た言葉を書いた心のこもったプレゼントを持って来るべきだったと悔やんだことだった。またお菓子の中に、なんとトルコの有名なお菓子ロクムのひと箱を見つけて驚いた。わたしがトルコに災害支援に始まり 25 回以上訪れていることをまるで知っているかのようなサプライズなプレゼントであった。母親とこどもたちみんなを選んでくれた温かさが、この報告書を書いている今も伝わってくる。通訳の高橋さんと稲垣さんは時間通り 20 分間の通訳を終えると、別の家庭に向かって行ってしまった。言葉が不自由だからこそ各自準備してきた工夫を披露、あるいは咄嗟の閃きを多発しながら交流が始まった。平野さんのカードマジックにはアリーナさんは真剣そのもので種明かしを試み、濱島さんは自分の頭を指さし、短い髪を束ねるように求めて、とても無理だとこどもたちを困らせ、原口さんはお爺さん然としてこどもたちや大人の会話に耳を傾け聞いた。わたしはこどもたちが歓迎の歌と踊りを始めたので即座に飛び入り一緒に踊ったので、一気に盛り上がった。カタカナで用意しておいたロシア民謡「カチューシャ」を歌ったら、みんな驚き、合唱になった。ついでに日本の歌として「知床旅情」も歌ってしまった。歌詞の中に「遙か国後に白夜は明ける」とあるからだ。神妙に聴いてくれたようだった。コリガさん家族はロシア側の交流団に加わって北海道本土を訪れたそうで、私たちが手にしていた四島交流日ロ会話集そっくりのロシア版を持っ

てきて、片言の日本語を使って話しかけてくれた。夫君は択捉消防署勤務で不在であったが、またまた驚かされたのは、防災担当官であるとのこと。わたしが防災研究者で、海外にも支援や防災啓発活動をしていることを知ってか知らずか、あるいは天の導きかとも思われた。早速、持参していた防災資料をコリガ夫人に手渡したら、どうやら電話で連絡をされたようで、夫君が急いで仕事場から家に戻ってこられて握手を交わすことになった。写真を見せながらアリーナさんが「Chichi、Chichi」と教えてくれたりして、身振り手振りが主体の交流は笑いと乾杯と柔らかで温かな雰囲気の中で時を刻んでいった。言語は交流の大きな障害にはならない。相手の国に関心を持ち、笑顔で接することで、友好は間違いなく始まり、互いのこころのなかにはっきりと思い出を残し、再会を望みあう。市民は正しい交流を望んでおり、信じるものだ。偏見さえ持たされなければ。今回の研修と交流を通して、自然、歌、舞踊には国境はないことを再確認した。このキーワードが交流を確固たる極みに押し上げるに違いない。わたしは災害支援を通して、トルコ、ネパールへ総計 30 回ほど訪問し、美術、音楽、桜植樹、防災を基軸とするプロジェクトを展開しているが、災害の瓦礫、悲嘆、涙の中から常に新しい芽生えを育ててきたことから確信できる。

国後島の「友好の家」で開催された交流会において、地元紙「国境において」のセルゲイ・サマリユーク編集長が「こどもたちの交流を促進するべきだ。こどもたちは 1 時間で仲好しになり、別れるときは涙を流す」と云った言葉には、氏がビザなし交流の初回から取材してきた重みを感じた。



最終日の夕刻、ホームビジット先のアリーナさんが、友達を連れてカフェ「アリヤンス」にまで見送りに来てくれたのには感激した。この子には「スノーヴァ ウヴィーヂムシャ 東京！」と気持ちを伝えたかった。この地では携帯電話もメールも繋がらないので、出域した後々何ら写真もメッセージも遅れないことは無念の一語に尽きる。このような友情を失いたくはなかった。

これまでにビザなし交流で 2 万 2500 人以上が両島を訪れ、約 1 万人の住民と交流を図ることで、日本の文化を伝えてきたが、この交流事業において、将来を担うこどもたち同士の交流を一層深めることが望ましいと思う。

また、行政府から、日本の医療支援に感謝しているとの発言があったが、2003 年から昨年までに 215 人の患者を北海道本当の医療機関に受入れ、あるいは来訪する四島住民に対する健康診断や、北方四島の医師や看護師等の研修や四島への医療専門家の派遣等、医療支援促進事業を途絶えることなく展開してきたことを示している。物資供与支援も重要だが人命に係る支援の方が絆を強め、友好関係を一層深いものにするのだとの印象を深くした。

わが国国民のすべてが、四島の歴史と現状を知らずして、また自分なりに「新しいアプローチ」の一端を担うことなくして、領土が返還されることはありえない。北方領土に居住しているロシア人の認識を高める事業と共に、日本人の認識度も飛躍的に高めなければ、返還には結びつかない。

相互交流を通じて、相互理解が深まる。この運動は **face to face** を通してこそ最も効果を発揮する。一度きりのホームビジットではなく、交互に何度でも自由に交流ができるようになってこそ、本当の交流となる。

わたしは受信者から発信者になるように努めたい。

「エトピリカ号」は5月から始まり、10月中旬までの年度交流事業を終えてからも休むことなく、日本各地に寄港しながら四島返還を訴えている。北方四島には17,291人の元島民が居住していたが、すでに6割の方々が他界されている。

今回のようにわれわれ団員は、きわめて親睦的で率直な交流に接することができたが、初回のころは双方共に不信感や誤解も生じていたと、児玉団長から研修の中で伺った。1992年の初回から今日まで粘り強く民間交流事業を続けて、返還運動を率先してこられた団長には心から敬服し、感謝を申し上げます。児玉団長が訪問する至る所で、笑顔で迎えられハグで固く抱きしめられている姿は、わたしたちの誇りでもあり、運動の象徴でもある。

国民がより北方領土問題に関心を寄せ、理解を深め、その上で両国市民交流を深めていくことが、ホームランドへの道に繋がっていくことだろう。

(注1)：8月29日、ロシアは軍施設を有する国後・択捉において、陸上阻止訓練を主とした軍事演習を実施した。ロシアはオホーツク海を重視し、その要塞化を一段と目指して、昨年11月には地对艦ミサイルの配備を完了、いずれ防空システム強化に至るだろう。さらに本年2月には新しい師団配置を行うと発表、その規模は5000人～2万人と云われる。